荒川先生を偲んで

東京大学・政策研究大学院大学　名誉教授
東海大学　特別栄誉教授
黒　川　　清

荒川先生の主催された新潟大学の腎臓チームは、私にとって大恩人なのだ。

東京大学を卒業し、１年間のインターンの後、第一内科に所属した私は、吉利和教授から前田貞亮先生の主宰する腎臓グループで人工透析について研究するよう指示された。当時、東大には腎臓の移植に備えてコルフ型の人工透析器が一つ、外科にセットされていた。その当時、シアトルでテフロン製シャントができたことで慢性腎不全患者に長期に人工透析を繰り返して行えるようになったことを知った私は調布にある米軍病院に行ってみた。まったくの偶然なのだが、当時はベトナム戦争中で、内科のトップはシアトルから来たばかりで、腎臓の専門家で透析の経験者、日系二世のDr.ヤマウチで、協力してくれることになった。そこで東大病院にあるコルフ型の人工透析器を外科から借りながらシアトルから取り寄せたテフロンのシャントを第一例の患者さんの前腕に作成し、患者さんにはその都度２、３日入院しながら週１回、時には２回透析をさせてもらった。当時は１回ごとに使い捨てになるコルフのダイアライザーで１つ100ドル。当時の100ドルはなかなか払えるものではなく、払っても良いという患者さんに限って数回できるのだが、米軍病院チームが来るときには、このダイアライザーも持ってきてくれたが、彼らのスケジュールもあって週１、２回程度で数週間の延命が見られる程度の有様であった。Dr.ヤマウチが帰国後、内科の主任はアレックス・スローンというやはり腎臓内科の専門でしっかりサポートしてくれた。余談ですが、スローン医師とはその後家族ぐるみでのお付き合いが続き、私がペンシルバニア大学にいる頃に、ワシントン郊外の自宅を訪ねました。また、ロサンゼルスのリトル東京でクリニックを開業していた山内先生は、このDr.ヤマウチのお兄さんでした。良いご縁が続くのですね。

そうやっているうちにいくつかの症例の知見をまとめたものが私の博士論文になる。その当時、新潟大学と信楽園病院では平沢先生を中心とする慢性透析センターが開設され、透析研究会などでお会いすることになる。このチームにお会いし、そのお人柄からも「これで日本の透析医療は安心だ」と強く感じた。私は東大第三内科出身の三村信英先生が院長として開設されたばかりの虎の門病院分院に透析センターを設立する目的で、赴任することになる。金田浩医師、看護師数人と技師一人というチームで、新しいセンター構築にわくわくしていた。米国から取り寄せた最新の英語論文や参考書を皆で一緒に読み、勉強、議論し、欧州発の透析膜を張る透析器の購入なども加えた。最先端の透析センターができたと思う。１年間で私は東大に戻ることになり、二瓶宏医師が後任として虎の門病院に出向した。

その後の私は、機会があってペンシルバニア大学に留学、２年後に西海岸のロサンゼルスへ車で大陸横断、UCLAの関連病院、マウント・サイナイ病院のクリーマン教授の腎臓内科チームに移る。ペンシルベニア大学での研究室は基礎研究が中心で、医師でない研究者が多かったが、今度は大半が医師で、臨床業務をこなしながら研究していた。私も研究に加えて夜と週末は猛勉強してカリフォルニア州の医師免許、その後、内科専門医、そして当時できたばかりの腎臓専門医の資格を取った。もう帰国は無理、と覚悟したころだ。1974年、南カリフォルニア大に准教授として移籍、３年後にUCLAへ准教授として戻り、1979年には教授に昇進した。

そんな中、1983年秋に、私に米国留学を勧めてくれた先輩で、東京大学第四内科教授になっておられた尾形悦郎先生に帰国を説得され、助教授として帰国となる。想定外だった14年余をアメリカで過ごし、さらに想定外の帰国、89年に東大医学部第一内科教授、1996年10月に東海大学医学部長に就任、この頃は腎臓学会、内科学会会長、そして国際腎臓学会、国際内科学会の理事長や会長も務めることとなる。東海大学定年後は2003年日本学術会議会長、2006年第一次安倍内閣、福田内閣においては日本初の科学担当の内閣特別顧問、2011年12月には日本の憲政史上初となる国会の立法による東京電力福島第一原子力発電所事故調査委員会の委員長を務めた。

（「時代の証言者」読売新聞、2022年５月27日～７月13日を参照）

このような予想もできなかったキャリアを作っていただいた皆さんに感

謝しかありません。そんな中で、腎臓学会ばかりでなく内科学会など、グローバル世界への対応にあたっては、とりわけ荒川先生にはいろいろと忌憚の無い、大切な視点を教えていただき、内科、腎臓、透析などグローバル時代の学会活動が変わり始めた感じをヒシヒシと感じることができました。透析医療は政策対応もあり、日本は世界をリードする成果を挙げてきました。私達の基本は、学会は「学会長ではなく、学会会員」のものであるということです。「腎臓学会、内科学会など」のありようが国際化へとシフトしていく中、私に大いに共感し、「学会改革」に大きな力をくださったコアのお一人が荒川先生だったのです。

荒川先生が亡くなられたことを聞いたときは、本当に寂しく思い、私と一緒に手をつないで「グローバル時代の大学、学会のあり方」への対応にご指導と、励ましをいただいたことを改めて思い返します。

ほんとうにありがとうございました。